

YouTube の生の英語が聞きとれるための方策を考えさせる授業 —英語は Stress-timed, 日本語は Syllable-timed を手がかりに—

Having Japanese Students find Strategy to Comprehend YouTube's Natural English —Starting from “Stress-Timed English vs Syllable-timed Japanese”—

田 口 順 一*
TAGUCHI Junichi

要 旨

いつでもどこでも使える便利な YouTube を英語学習に使いたい気持ちは誰にもある。しかし YouTube から聞こえる生の英語は、日本語耳の理解を超えている。これを何とか聞きとれる方策を学生たちに考えさせたい。

生英語が聞きとれないのは、音素の違いよりも、リズムの違いが大きい。英語文は、単語数が増え音節数が増えても、ストレス（強拍）数が同じなら、発話時間はほぼ不変だ。強拍でリズムをとるから、弱拍音節は微小化し、母音が脱落し、破裂子音が不発になる。だから、学校英語音とはまるで聞こえ方が違う。このメカニズムを、教員志望の英語学習者は体得して、生英語を聞きとるための方策を自分で考えて、将来の授業に役立ててほしい。さらに、聞きとるべきは内容であって、単に音ではない。音を聞きとろうとしても、内容理解なしでは音も聞きとれない、ということも体得してほしい。

本稿は、そういうもくろみで行った「奈良県次世代教員養成塾（高2生対象）」80分1回の講座と、大和大学英語教育専攻の学生への90分×15回の授業の報告である。

Abstract

Why not use YouTube for learning English? But alas the English spoken on YouTube is hardly comprehensible to Japanese ears. How beneficial it would be if our students found their own strategy to make it easier to our ears!

Why incomprehensible? Though most Japanese will say it is due to the difference in phonemes, the most difficult factor lies in the rhythm. In Japanese, the more words a sentence has, the longer it takes to say it. But in English the number of words matters little. What matters is the number of stresses. More stresses mean longer time; fewer stresses shorter time. Stress timing makes unstressed syllables reduced making vowels drop and plosive consonants lose actual positions. This makes it very hard for Japanese ears to make sense of English sounds because they sound very different from what are taught in most Japanese schools. Our would-be teacher students need to realize this mechanism to find the strategy to comprehend real English sounds and get themselves ready to teach the knacks of listening in their future classes.

What should be comprehended in the end is not the sounds themselves, but what is meant. If you want to catch the sounds, it works better when you put priority in the meaning.

The following is the report from what I lectured to high school 2nd year students and university students, both of whom are would-be teachers.

キーワード：YouTube 英語 英語が聞きとれない 英語のリズム 母音脱落 寸止め子音

keywords：YouTube English, strategy for English listening, stress-timed language, syllable-timed language, reduction of English sounds

1. はじめに

－ 問題の所在と、取り組みの方向性

ほとんどの日本人は、native 同士の会話は聞きとれない、映画の英語が聞きとれない、インターネットで流れてくる英語のニュースが聞きとれない、という現実があります。高校卒業段階ではもちろん、大学を出ても、ごく一部の例外を除いては聞きとれないままです。

私が学生だった数十年前に比べれば、テクノロジーの進歩や ALT の存在などのおかげで、生の英語に触れる機会は飛躍的に増えているにもかかわらず、native 英語を聞きとることにについては、飛躍的な進歩はないようです。

native 同士の会話や、映画、ニュースが聞きとれないとは言っても、授業で使用する CD が聞きとれなくて困るという話はあまり聞きません。また、学校に付属されている ALT の英語がまるで聞きとれなくてお手上げだ、とも聞かないし、NHK の語学番組の native 講師の英語が聞きとれないともあまり聞きません。今は聞きとれなくても、回を重ねて練習すればきっと聞きとれるはずだという安心があるようです。

それにひきかえ、native 同士の会話や、映画、ニュースが聞きとれないということについては、絶望に近い諦めがあるようにすら感じられます。

別の表現をすると、授業用 CD など日本語耳に合わせて調整された英語なら、なんとか聞きとれる（今は聞きとれなくても聞きとれるようになるだろう）という一種の安心感があるのに対し、未調整で生のままの英語がほとんど聞きとれないし、聞きとれるようになりそうにないという、絶望感が見うけられます。この安心と絶望のギャップの正体は何なのでしょう。どうすればこのギャップを克服し、生英語をちゃんと聞きとれるようになるのでしょうか。

生徒や学生だけではなく、中学や高校で英語を教えておられる先生方も多くは、未調整で生のままの英語の聞きとりにはあまり自信がないように見えます。採用試験でもそこまでのリスニング力をテストされるわけでもなく、先生方ご自身がギャップの手前で止まったままというケースが多いのが実情ではないのでしょうか。（長期留学生などを除けば）生活言語として日常的に英語を使うこともなく、大学の授業もほとんど日本語（でなければ、調整済みの英語がせいぜい）という環境の中での英語歴ですから、相当な努力をしても限界があり、結局ギャップを乗り越えられないからでしょうか。

また、教員に求められる英語力についても、大学入試や高校入試への対応力が、生英語理解力よりも重視されているという現実があり、教壇に立つようになってからも、生英語聴解力を向上させる必要を切実には感じない

ということも原因なのかもしれません。

このギャップが生じる原因は何かということをも具体的なイメージで学習者たちに体験的に把握してもらえれば、ギャップを超えて、生英語聴解力をつけることが少しでも易くなるでしょう。以下はそうした試みからの報告です。取り組みの1つは「奈良県次世代教員養成塾」参加者（高校2年生）への講義と調査、もう1つは大学1・2年生対象の授業でした。

2. 日本の高校生は英語音と日本語音の違いをどの程度教えられているか、理解しているか

－ 「奈良県次世代教員養成塾」参加者への講義と、講義後のアンケート分析

「奈良県次世代教員養成塾」第1期第4回講座の一部として、日本語耳はどうして英語が聞きとれないかを話す機会をいただきました（2019年1月12日大和大学にて）。対象は、小学校の教員を志望する高校2年生60人でした。教員志望ですから、平均的な高校生よりまじめで、日頃からきちんと授業を受け、内容もよく理解しているだろうと思われまます。それで、英語音についてどれだけのことを教えられているか、学んでいるか、というサンプルには最適だろうと考えました。また、小学校で正規の科目として「英語」が導入されるので、motivation も高いだろうと期待しました。他の講座との関係で2グループに分け、時間は各グループ70～80分しかいただけませんでした。参加者の1人1人が生英語ギャップを乗り越えるための一助となるように、生の英語音が聞きとれない理由を駆け足ながら説明するとともに、自分で体験的に感じ取ってもらえるように、と工夫しました。具体的にどんなことをやって、どんな反応だったのかを、事後のアンケートなどを利用して記します。

2.1.1 英語音と日本語音の違い(奈良県次世代教員養成塾で高2生に話した内容から)－ 母音量と子音量

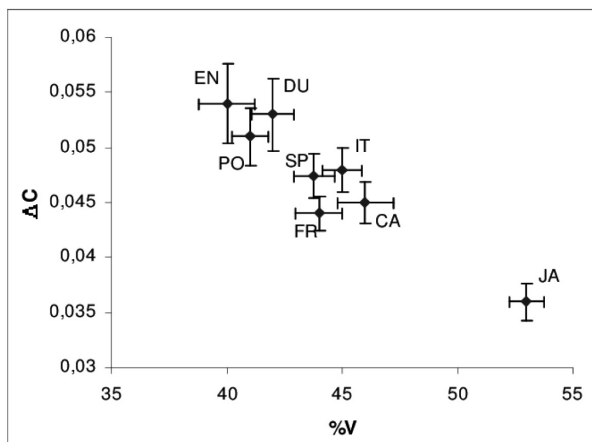
冒頭に、「語彙や文法を学んだだけではほんとうに外国語を学んだことにはならない、言語の本質はコミュニケーションであり、そのコミュニケーションを支える土台が音声だ」ということを話して、英語音声の重要性に目を向けてもらいました。（事後のアンケートでは、「英語授業でコミュニケーションを意識したことはなかった」という内容を書いていた人が多数ありました。）

そのうえで、日本語と英語の音声の違いをイメージしやすくするために、まず最初に図1を見てもらいながら説明しました。なお、

- ・右下の **JA** が日本語で、左上の **EN** が英語です。
- ・横軸は、発話（＝子音＋母音）に占めるの母音の割合です。

・縦軸は、子音（や子音連続）の長さの標準偏差です。

(表 1) (Ramus 2002, p.30) (井上美穂2009)



- ・ English 英語 Dutch オランダ語 Polish ポーランド語 (stress-timed languages)
- ・ French フランス語 Spanish スペイン語 Italian イタリア語 Catalan カタロニア語 Japanese 日本語 (syllable-timed languages)
- ・ X 軸：母音クラスターの長さが文全体の長さに占める割合 (母音の割合)
- ・ Y 軸：子音クラスターの長さの標準偏差 (子音の長さがどれくらい変わるか)

表 1 を見ながらだと、次の説明内容が容易にイメージできると思います。

- ① 英語は子音主体で、日本語は母音主体（発話中、英語は子音が60%、日本語は47%）。だから、日本語耳は5母音を聞きとろうとするが、それでは子音主体である英語はうまく聞きとれない。
- ② 日本語の子音は短く（長さが一定、というより、短さが一定で）、子音だけを伸ばすことはまずない（「ん」だけが例外か）。英語は子音（や子音連続）の長さが大いに変化し、非常に長くなるのが頻繁にある一方で、極端に短くなることも頻繁にあって、日本語耳にはうまく聞きとれない場合も多い。

2.1.2 日本語と英語の子音の長さ比較

— 無声破裂音 /p//t//k/ を例に

次に、英語を話す時の子音の長さが、英語母語話者と日本語母語話者では大いに異なるということを、表 2 の実験とその結果（表 3）を見てもらいながらイメージしてもらいました。

実験は、アメリカ人と日本人に次の文を言ってもらい、無声破裂音 /p//t//k/ で、VOT（破裂が始まってから、声が出始めるまでの時間）を測定したものです。

(表 2) (Nagamine 2011)

“Say _____ again.”	← 下線部に下の語を入れる
/ p /	--- pit, pat, put
/ t /	--- tick, tap, took
/ k /	--- kick, cap, cook

VOT (voice onset time) Values of Native Speakers of English and Japanese

(表 3) (Nagamine 2011)

	/ p /	/ t /	/ k /
English* (American)	58.00	70.00	80.00
Japanese**	30.00	28.50	56.70

(単位1000分の1秒)

*English data was taken from Lisker and Abramson (1964).

**Japanese data was taken from Riney, Takagi, Ota, & Uchida (2007).

破裂する空気音の持続が、native speaker は日本人英語話者よりうんと長いことがイメージとして把握できます。

- / p /では約2倍、
- / t /ではなんと2.5倍近いし、
- / k /でも違いは明らかです。

このことから、日本人の英語が相手に伝わらないのは子音量不足だということは容易に納得できるでしょう。表 1 では日本語より子音量が多いはずのフランス語やスペイン語、イタリア語話者の英語ですら、通じにくいという定評があるが、日本語話者の英語はそれよりさらに通じにくいこともイメージしてもらいました。

（しかし、常に英語子音がうんと長いなら、日本語耳にとって聞きとりには支障はないはずですが。どんな時に聞きとれないのか、その原因は何だろうか、という詳細はここでは触れずに、後ほど説明しました。）

2.1.3 日本語と英語の子音の長さ比較

— 日本語「ラ行」は弾き音、英語 L・R は持続音

続いて、日本語の「ラ行」と英語 R 音、あるいは、日本語の「ラ行」と英語 L 音は、全く別の音だということをイメージしてもらいました。

日本語の「ラ行」[r] は弾き音であり、子音は一瞬で終了し母音に移行します。その証拠に例えば「ラ」を長く伸ばすと、伸びるのは母音だけです(みなさんにやってもらい、なるほどと確認してもらいました)。

それに対して、英語 R 音 [ɹ], L 音 [l] はともに持続音で、子音だけを息が続く限り長く出し続けられることも、体験して確認してもらいました。

L 音を十分長く持続させないと I love you. も気持ち

が伝わらないことも私の実演で納得してもらえたようです。

Right!やWrong!という主張を含んだ発言もR音の持続がないとちゃんと主張として伝わらないということも同様に、実演で納得してもらえた様子でした。

この日本語子音の「弾き音」と、英語子音の「持続音」というコンセプトは今まで全く聞いたことがなかったようです。

「弾き音」対「持続音」という区別を、ちょっと拡張して「瞬間音」対「持続音」とすると、他の子音にも当てはまります。日本語子音は本質的に「瞬間音」で、英語子音は本質的に「持続音」なのです。

例えば、日本語「ナ行」「マ行」の子音はごく短時間で終わるのに対して、強調時の英語N音M音は口の中で響いている時間の持続があるということも、実際にやることで体験してもらいました。

否定の気持ちを強く表す時のNo!やNeverの例や、自分のものであることを強調するmyやmineの例がわかりやすかったようです。(誰かに自分のバッグを持って行かれそうになって“This is my bag! Not yours!”とか“It’s mine!”とか叫ぶという状況で通じる英語音がどんなものかを演じました。)

ここまでで、英語子音は持続する、日本語子音は一瞬で終わる、というイメージはしっかり持ってもらえたようです。

(しかしこれだけでは、英語の子音が極端に短くなって日本語耳には聞こえないのはどんな時なのか、それはなぜなのか、どうすれば聞こえるようになるのか、はイメージできません。それにはまず、日本語と英語のリズムのとり方の違いを感じ取ってもらう必要があります。)

2.1.4 英語は stress-timed language 日本語は syllable-timed language

次は、表4を見てもらいながら質問しました。「この5つの文のどれが読むのにいちばん時間がかかりますか？」

(表4)

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. Dogs chase cats. 2. The dogs chase cats. 3. The dogs chase the cats. 4. The dogs will chase the cats. 5. The dogs will be chasing the cats. |
|--|

当然、「5番がいちばん時間がかかる」という答が返ってきます。

「なるほど、日本人が読むとそのとおり、5がいちば

ん時間がかかります。しかし、native speakerが読むと1も5もほとんど同じ長さなんです」と私が(もちろん偽者ながら) native speaker になりきって実演しました。

そして、「どの文も、強くはっきり読むのは3箇所だけです(表5で太字の語)」と説明しました。

(表5)

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. Dogs chase cats. 2. The dogs chase cats. 3. The dogs chase the cats. 4. The dogs will chase the cats. 5. The dogs will be chasing the cats. |
|---|

「言い換えれば、どの文も stressed syllables は3つだけで、3拍で読むのが英語です。こういう言語を stress-timed language (ストレスでタイミングをとる言語) と言って、表1の英語・オランダ語・ポーランド語のグループです。ドイツ語やロシア語もこの仲間です」

「それに対して、日本語は『子音+母音』(CV)の均等な音節が並ぶ言語で、この点ではスペイン語やイタリア語とリズム的に非常に似通っています(syllable-timed languages)。日本人もイタリア人もスペイン人も英語が苦手なのが証拠です」(厳密に言うと、日本語は mora-timed であって、syllable-timed とは少し違うという観点もありますが、ここではそんな説明を加えても混乱させるだけなので触れませんでした。)

「ストレスがあるのは《内容語》です。dogs も chase (追いかける) も cats もはっきりした意味がある《内容語》です。ところが、the, will, be, -ing は意味らしい意味があるのかないのか…。「文法的な役割をしているだけ」と考えた方がいいようです。これらは《機能語》といい、特別な理由がない限り、ごく短く軽く発音されます。明確には発音しないんです。機能語をいちいちはっきり発音しようとするとう英語らしくならなりませんね(ここで典型的日本人英語を実演)。というわけで《機能語》は、日本語耳にはよっぽど慣れないと聞きとれないことが多いんです」

「機能語は、代名詞・助動詞・前置詞・冠詞・接続詞などで、実は native も音としては聞きとったり、聞き分けたりしていない場合もよくあります。例えば in か on か an か and か音では聞きとるというよりむしろ、文脈や文法で聞き分けています」

「ところが、日本人向けに録音したCDなどは、機能語まで(不自然に)はっきり発音しているものが多いので、日本耳には聞きとりやすいんですが、それが災いしてYouTubeの英語が聞きとれるようになるのにはつながりにくいんです」

「ストレスがある語でも、ストレスのないシラブルは

母音が弱くなって、あいまい母音 [ə] になったり、さらには抜け落ちたりします」

以上のような説明を、体験的要素も加えたせいか、高2生のみなさんは非常に興味深く聞いてくれている様子でした。日本語の syllable timing と英語の stress timing との違いは、きっとしっかりイメージできたでしょう。(時間の制約上、子音が極端に短くなる、あるいは消える、ことについては説明しきれませんでした。説明予定内容も含めて次に記しておきます。)

2.1.5 英語の子音は(日本語耳には)消えることがある

— 「内破音」あるいは「寸止めの破裂音」

Good night. の d が聞こえない, Help me. の p が聞こえない, handbag の d が聞こえない, Oh, my God. の d が聞こえない, picnic の c が聞こえない, ということはどういうことなのでしょう。もともと発音していないのでしょうか。それとも, native 耳には聞こえるのに, 日本語耳には聞こえないという奇怪なことが起きているのでしょうか。奇怪現象だとしたらどんなメカニズムが働いているのでしょうか。

聞こえない例にあげた d[d], p[p], c[k] は全部破裂音ですが, 破裂音は「閉鎖音」とも言います。破裂するためには, 空気の通り道を閉鎖して空気を溜めて, 空気圧を高めておく必要があるからです。

ところが, 空気圧が高まって, さあ破裂するぞ, と準備ができていのにリズムの都合などで, 破裂しないで止まってしまう場合があります。つまり, 破裂音が破裂する直前で寸止めになってしまい, 日本語耳には聞こえないのです。しかし寸止めであっても, 英語の native の耳には聞こえます。破裂 (=閉鎖の解放) がなくても子音として認識されるのです。(韓国語はこの寸止め破裂を多用するので, 韓国語母語話者にもこの寸止め子音は難なく聞きとれます。) 子音が消えたのではなく, 日本語耳に聞こえる音になる手前で止まっているだけなのです。

日本語耳に聞こえるように破裂する破裂音を「外破音」と言うのに対して, この寸止め破裂音は「内破音」と言います。

このやっかいな内破音を聞きとるにはどうしたらいいのでしょうか。聞きとる手がかりはあります。「空気の通り道を閉鎖して空気を溜めて, 空気圧を高める」にはそれだけの時間がかかります。この時間が寸止めを聞きとるカギです。Good morning の d が聞こえなくても「ゲー」なのではなくて, 寸止めの d が隠れています。football の t が聞こえなくても, b の前にごく微少な音の空白があります。that child の t が聞こえないときには ch の前に空気圧を高める時間が (ほんのわずかです

が) あります。(この時間はごくわずかなので, 音 (の空白) だけで聞きとるより, 文脈や文法にも大いに助けられていると考えた方が良いでしょう。)

日本語耳には捉えられないが, native speakers には認識される「内破音」あるいは「寸止め破裂音」のイメージがこれでできたかなと思います。

2.1.6 代名詞や助動詞の H 音脱落

繰り返しますが, 「英語は stress timing ですから, 機能語は日本語耳には聞きとれないほど存在が軽くなるのがしょっちゅうあります。日本語耳には音として聞きとれなくても, それは当たり前なんだ」ということを強調しました。学校で習った発音通りには聞こえないのです。その例に代名詞や助動詞の次のような H 音脱落があります。

he, his, him, her → e, is, im, er

have, has, had → ave, as, ad

また, this, that, they の th が軽くなって空気が擦れる音が消えてまるで n のように聞こえることもあります。

this, that, they → nis, nat, ney

このことを native speaker がとてもわかりやすく解説した動画が YouTube 上にあるので紹介を兼ねて, ほんの一部だけですが見てもらい, 自分でもやってもらいました。(The “H” Reduction in American English Pronunciation | Rachel’s English というものです。)

1:55あたりから Rachel さんが, have / has / her / his などの h 脱落を実演されています。例えば

What have you done? What have → Whatave

My friend has seen it twice. friend has → friendas

I saw her sister in Chicago. saw her → sawer

What was his name again? was his → wasis

この動画は好評で, 後の感想に「Rachel さんの動画で発音を勉強したい」というものがいくつかありました。

2.2 事後のアンケートや感想とその分析

2.2.1 アンケートの内容と集計結果

「教師塾」のその日のプログラムの最後に, 次のようなアンケートに答えてもらいました。集計結果とともに示しておきます。

(表 6)

<p>【第1部】 今回の講座を受ける前のあなたについて教えてください。 (回収数 60)</p> <p>1. 英語 L 音の出し方の説明をきちんと受けた記憶が (ある 33・ない 27)</p>

2. 英語 R 音の出し方の説明をきちんと受けた記憶が
(ある 34・ない 26)
3. 「英語 L 音 R 音は持続音で、日本語ラ行の子音は瞬間音だ」との説明を受けた記憶が
(ある 5・ない 55)
4. 日本語に比べると英語は子音がはるかに強烈で長いという説明を受けた記憶が
(ある 7・ない 53)
5. 英語の子音は長さや強さが非常に変化するという説明を受けた記憶が (ある 6・ない 54)
6. 英語の音節(シラブル)は、長くなったり短くなったりするとの説明を受けた記憶が
(ある 9・ない 51)
7. 英語が聞きとれないメカニズムの説明をきちんと受けた記憶が (ある 8・ない 52)
8. 英語と日本語では言語リズムが違う(日本語は音節数でリズムを取るが、英語はストレスでリズムを取る)との説明をきちんと受けた記憶が
(ある 8・ない 52)
- 【第2部】受講後のあなたの感想を教えてください。
9. L 音の身につけ方の説明は納得いきましたか。
(納得 59・不納得 0・どちらとも言えない 1)
10. TH 音の身につけ方の説明は納得いきましたか。
(納得 52・不納得 0・どちらとも言えない 7)
- 無記入 1
11. YouTubeなどで英語のリスニングに挑戦してみよう
(思う 58・あまり思わない 2)

2.2.2 「アンケート」や「感想」から読み取れること

「1. 英語 L 音の出し方の説明をきちんと受けた記憶が(ある 33・ない 27)」と「2. 英語 R 音の出し方の説明をきちんと受けた記憶が(ある 34・ない 26)」を見ると、驚いたことに、L 音 R 音の出し方の説明を受けた記憶がない人が半数近くいます。

「3. 英語 L 音 R 音は持続音で、日本語ラ行の子音は瞬間音だ、との説明を受けた記憶が(ある 5・ない 55)」からは、ラ行子音と英語 L 音 R 音の根本的な違いを教えてももらっていないし、当然身につけてもいないと考えられます。(日本語「ラ行」/r/は「弾き音 flap/tap」で、一瞬で終わって母音に移行します。それに対して、英語 L 音/l/も R 音/r/も持続音で、子音だけで十分な持続がなければちゃんと伝わるだけの音価になります。)

R, L について代表的な感想は次のようでした。

- ・英語と日本語の発音の違いで実際に L 音や R 音の発音をやってみたこと(が特に印象に残った)。今までここまでしっかりこのような講座をうけた

り発音を体験したことがなかったのでとても新鮮だったし、実になる内容だった。

「4. 日本語に比べると英語は子音がはるかに強烈で長いという説明を受けた記憶が(ある 7・ない 53)」と「5. 英語の子音は長さや強さが非常に変化するという説明を受けた記憶が(ある 6・ない 54)」から確認できるのは、「英語子音は日本語子音より強烈で長いのが基本で、それが強調などでさらに長くなったり、また逆に時と場合によって非常に短くなり、日本語耳には聞こえないことすらある」ということが教えられていないようだという事です。子音の長さについては次のような感想がありました。

- ・「L」「R」の発音の違いで聞こえ方が全く違うし、英語の子音を伸ばすと強調できたりだとか、日頃意識しなかったから意識して読むようにする。

「6. 英語の音節(シラブル)は、長くなったり短くなったりするとの説明を受けた記憶が(ある 9・ない 51)」と「8. 英語と日本語では言語リズムが違う(日本語は音節数でリズムを取るが、英語はストレスでリズムを取る)との説明をきちんと受けた記憶が(ある 8・ない 52)」からは、syllable timed と stress timed という日英語の音声面での根本的な違いが、納得いくように説明されていないことがわかります(用語は別に教える必要はありませんが、ストレスでリズムをとるという英語の特性を理解し体得することは、生英語を聞きとるうえで不可欠だと思います)。

それで結局、「7. 英語が聞きとれないメカニズムの説明をきちんと受けた記憶が(ある 8・ない 52)」のように、英語が聞きとれるためのメカニズム理解ができないまま今に至っているのだと思われます。これでは、ほとんど全員が「11. YouTubeなどで英語のリスニングに挑戦してみよう」という意欲があるのに、全く残念なことです。

日本語と英語のリズムの違いについての代表的な感想は次のようでした。

- ・英語はストレスでリズムをとることにとても驚きました。こんな長い文、絶対に3拍で言えないだろうと疑いましたが、先生は本当に3拍で言い切っていたので、びっくりしました。
- ・実際にリズムで英語を発音することで母音を短くする方法も知ることができ、今までの自分の勉強法と全く異なることがわかりました。
- ・同じ秒数で(長さの違い)文を読めることもわかった。
- ・3拍のうちに英文を読むことを体験することに

よって、省略して読む語などを自然に理解できました。

英語が聞きとれないメカニズムに関しては例えば次のような感想がありました。

「外国語について日本人はどのように勉強すれば良いのか、どうすれば聞きとれるようになるのか疑問でしたが、日本人が英語を理解しづらい理由と、その改善点を知ることができたのでとても勉強になりました」

「なぜ英語が聞きとれないかという話で、すごく納得した」

「外国語（英語）の発音であったり、リズム、そして日本語との違いについて根本からわかりました」

「ネイティブの英語と日本人の英語の違いを、実際に発音することで感じれた。自分がもし、きちんとした発音を教えられたら、どういう風に生徒が成長してくれるのかなと思って、それを考えるのが楽しかった」

「発音の仕方やネイティブの短縮の仕方など、聞いたことがない教え方がとても新しく、楽しかった」

「英語の発音とか、機能語をどのように短くしているのかを体験しながら学べた」

「日本語と英語の発音を通して、省略する語などが分かったので、リスニングをする時に活用できると思いました」

アンケート項目にはありませんが、英語というと文法や語彙ばかり意識している自分に気づいた、コミュニケーションの重要性に改めて気づいた、という感想も多くありました。例えば、

「今まで文法や単語ばかり教えられて勉強してきました。私自身それが一番大切だとも思っていました。しかし発音の仕方や聞きとる方法をきちんと教えてもらい、外国語教育はとても大切なんだと気付きました」

「英語の特徴をしっかり身につけ、“コミュニケーションができる”英語を少しでも話せるようになる（ことをめざしたい）」

「実際に発音をしてみて、今までやっていた授業が変だと振り返ることができた」

3. 英語教員志望の大学生への Listening 指導

—stress timing を軸にして

「教師塾」は1回きりのレクチャーでした。アンケートでは高校生たちから高い評価をいただきましたが、1

回きりですから、その時には反応がいくら良くても、内容が定着して聞きとり力向上につながるのの期待はあまりできません。

そこで、大学の半期の授業（90分？15回）でじっくり時間をかければきっと効果が出るに違いないと判断し、今まで以上に意図的にやってみることにしました。対象は英語教員志望の大学1年生（46人）と2年生（17人）です。英語教員志望と言っても、英語検定2級程度でずば抜けた英語力があるわけではありません。以下は2年生について分析したものです。

3.1 stress timing と音の脱落を結びつける。

最初の授業で、「教師塾」と同じ内容を圧縮はしたものの、体験的に理解できるよう説明しました。

そして、“聞きとりという「音」を聞きとろうとするが、実は「音」を聞きとるだけでは「音」は聞きとれない。意味を聞きとらないと音は聞こえない”という禅問答のような説明もしておいて、15回の授業が終わったときにどんな効果が出るかを期待しました。

もちろん、個々の音や単語を聞きとって全体を理解しようとする bottom-up listening と、逆に全体やコンテキストから細かい部分を理解する top-down listening の両方を意識しながら理解していく必要性なども強調しました。

3.2 15回の授業で扱った聞きとり材料

授業ではインターネット上の動画を使用しました。もちろんどれも、日本人向けに調整されたものではなく native speakers 向けのもので、表7に、使用順に並べてあります。動画は、できるだけ短く（例外を除いて、約1～3分）、しかもメッセージがはっきりしていてインパクトが強そうなものを選びました（表7）。

①を例にとると、題名の次行の「1:20 195語（146語/分）」は順に「動画の長さ」「語数」「1分あたりの語数」「その動画を期末レポートの対象に選んだ学生の人数（受講者17人中）」です。⑩のように、動画の長さの後に（ ）があるのは、動画の前後にあるセリフのない場面を除いた長さです。

（表7）

2019前期 Intensive Listening (2回生) 使用動画
① Jacinda Ardern condemns Christchurch mosque shootings 1:20 195語（146語/分） 6人
2019年3月15日クライストチャーチのモスクでの乱射大量殺人事件直後の首相演説。襲撃されたイスラム教徒のことを They are us. と言っている。
② Mass shooting at two Christchurch mosques 2:18 248語（108語/分） 3人

- ①の乱射事件そのもの
- ③ **Paris' Notre Dame cathedral 'saved, preserved' after massive fire** / Al Jazeera English
2:04 324語 (157語/分) 5人
ノートルダム火災 (2019)
- ④ **Fossils of new human species found in Luzon**
0:57 97語 (102語/分) 1人
フィリピンで発見された旧人類の化石 (2019)
- ⑤ **First ever black hole image released** : BBC News
1:29 (1:19) 123語 (83語/分) 5人
ブラックホールの画像撮影に成功 (2019)
- ⑥ **Montgomery Bus Boycott 1955**
5:34 (5:17) 661語 (125語/分) 0人
ローザ・パークスのことはみんな習っているはずなので、長いが取っつきやすいかと判断
- ⑦ **The Underground Railroad**
1:00 (0:57) 126語 (133語/分) 5人
黒人奴隷をカナダまで逃がした秘密組織「地下鉄道」(18世紀末から南北戦争まで)
- ⑧ **Black History Month: Josiah Henson**
0:50 (0:38) 80語 (126語/分) 3人
「地下鉄道」による奴隷の逃亡。「アンクル・トムの小屋」のモデル
- ⑨ **Abolitionists and the Underground Railroad 4 minutes** 4:40 541語 (116語/分) 0人
「奴隷廃止論者と地下鉄道」地下鉄道の組織がよくわかる。次のハリエット・タブマンの話への繋ぎ。軽く見ただけ
- ⑩ **Harriet Tubman: Soldier/Spy**
2:35 (2:19) 359語 (139語/分) 6人 地下鉄道の車掌。北軍のスパイ、(女性としては初めての) 攻撃の指揮者
- ⑪ **Robert Smalls: How a Slave Became an American Hero** 2:06 (1:48) 277語 (154語/分) 7人
奴隷でありながら南軍の軍艦を盗んで、北軍で活躍
- ⑫ **Billionaire pledges to eliminate student loans for Morehouse College Class of 2019**
2:47 (2:20) 205語 (88語/分) 9人
黒人名門大学の卒業式の演説で大富豪が学生ローンを肩代わりしてあげると発言
- ⑬ **Good Luck Topping This Commencement Speech** / The Late Show with Stephen Colbert (2019)
3:37 (3:26) 388語 (113語/分) 3人
⑫を取り上げたニュースショー。富裕者に課税したら授業料を無料にできるよ
- ⑭ **Aug. 28, 1955 : Emmett Till, Age 14, Abducted and Murdered** / Voices of the Civil Rights Movement
3:33 (2:59) 336語 (113語/分) 3人
14歳の黒人少年が虐殺された事件。差別のむごた

- らしさが世界中に報道された
- ⑮ **FREEDOM RIDERS** : coming to PBS May 16
Behind the Scenes Interviews PBS
1:30 263語 (175語/分) 3人
長距離バスの差別をなくすために、白人黒人の学生がバスで南部へ (1961) (番組予告)
- ⑯ **Greensboro Lunch Counter** / Newseum (1960)
1:01 140語 (138語/分) 6人
黒人には食事させない食堂での座り込み
- ⑰ **60 Years On, A Look Back at the Little Rock Nine** / Associated Press (1957)
3:09 518語 (164語/分) 3人
白人専用高校へ黒人が初登校。州知事が州兵を使って登校阻止
- ⑱ **Calendar Days : Independence Day : 4th of July**
History (1776) WatchMojo.com
2:26 (2:17) 358語 (157語/分) 6人
アメリカ独立記念日。自由・平等・幸福追求権 (アメリカの夢)
- ⑲ **Children in Internment Camps : A Japanese American's Reflection** / Smithsonian Channel
2:27 (2:19) 179語 (77語/分) 6人
第二次大戦中の日系人強制収容 (1942-5)

授業の進め方は動画の内容や長さなどによって、穴埋め中心のこともあれば、用意した質問に答える形式もあり、いろいろ変化しましたが、図式化すれば例えばだいたい次のようでした。

(背景や内容に関する説明や資料→) 聞きとり (1)
→ (背景や内容に関する説明や資料→) 各自聞きとった内容をメモ→メモを元に3・4人のグループでどんな内容か話し合う→聞きとり (2) →さらにメモ・話し合い→聞きとり (3) →…

1回動画を見聞きしてから背景や内容を説明した場合もあれば、逆に背景や内容を説明してから動画を見聞きした場合があります。また、みんなの理解度に合わせて適宜、聞く回数を増やしたり、理解を助けるような質問も入れたり、解説を加えたり、グループを越えて情報交換をしたりしました。

長い動画は1分ぐらいずつに分割しました。スクリプトは頃合いを見て授業中に配りました。

(スクリプトの作成について説明しておきます。きちんとした字幕が動画についていて、しかもコピーで取り出せる場合はいいのですが、そううまくはいきません。取り出せてもAIによる自動生成字幕が多く不正確で、授業で使えるようにするにはかなり手間がかかりました。字幕がない場合は、ゲーグルドキュメントの音声入力機能を利用しましたが、自分の耳の方が正確なこともよく

ありました。)

3.3 こういふ動画を材料として選んだ意図

動画19点の内訳は以下の通りです。

- ・時事ニュース：7 (①～⑤, ⑫⑬)
- ・黒人奴隷の逃亡や解放に関するもの：5 (⑦～⑪)
- ・公民権運動に関するもの：5 (⑥, ⑭～⑰)
- ・アメリカ独立宣言：1 (⑧)
- ・日系米人の第二次世界大戦中の強制収容：1 (⑱)

時事ニュース7のうち①②は、クライストチャーチのモスク襲撃, ⑫⑬はキング牧師の母校でもある黒人男子大学の卒業式に関するものですから、ほとんどが人権, 人種差別や偏見, に関するものです。

こういう内容に絞った理由はいくつかありますが, その1つは, 聞き応えがあるかどうか, 聞きがいがあるかどうか, 時間が経っても覚えていてくれるだけの内容があるかどうかです。(昨年は, 大学生向けに編集された市販のニュース教材冊子を使いましたが, 興味を引きそうな材料を選ぼうと意図しているようだが, 結局無難な内容で, 深い掘り下げもありません。それで, 内容も表現も学生たちの記憶には残らず, ただ難しかった, しんどかったという印象だけ残ったようです。1年以上古いニュースであるうえ, 毎回トピックが変わるので, 全体としてはバラバラで深く印象には残らなかったということでしょう。それで今年度は私自身が毎回の材料を探して編集することにしました。)

もう1つの理由は, 現在の社会情勢です。ヘイトクライムやヘイトスピーチが世界のあちこちで起きています。また, 日本では外国人労働者を今まで以上に迎え入れようとしており, 教室にも外国人生徒がいるのが普通になるでしょう。それで, 教員志望の学生たちにはアメリカの公民権運動をどうしても知っておいてほしい気持ちでした。教員になると自分のクラスに何人か外国にルーツのある児童や生徒がいて当たり前であり, その子たちを迎え入れるための知識と気持ちの準備をしておくべきだと考えました。

さらに言うと, King 牧師の I Have a Dream 演説は定番教材として多くの教科書に出っていますが, 後半しか扱っていません。この演説の真骨頂は前半にあって, 「奴隷解放宣言が出て100年にもなるのに, まだ黒人はこんなひどい扱いを受けている」という恨み辛みを述べています。だからこそ後半の「それでもまだ私には夢がある」が生きてくるのですが, 学生たちは前半についてはほとんど知りませんでした。前半を理解するために, 黒人奴隷や公民権運動の歴史を知ってほしかったのです。

3.4 どんな効果があったか

—学生たちの最終レポートから

期末レポートは, 授業で使った19の動画から5つ以上選び, そのそれぞれについて, 次のガイドラインに沿って書くように求めました。

(表8)

- a) (いつ, どこで) 何回ぐらい, どれぐらい熱心に見聞きしたか。
- b) 聞きとりにくかった語句や表現を具体的に抜き出す(できれば分析する)。
(また, それらの語句や表現のそれぞれが, 聞きとれるように進歩したか, 進歩はあまりなかったか, 聞きとれない原因は何だと推測するか。)
↑リスニング力を高めるために, メタ認知力を強化しよう。
- c) 「こんな言い方をするんだ! これは面白い! これは大発見! など」の表現を抜き出して具体的に書いて, 面白おかしく美しく解説を加える。
↑語彙力を高めるために, メタ認知力を活性化しよう。
- d) 動画の内容についての感想。
↑内容を理解し心で受けとめることが, 語学力を伸ばす基本。心で学んでいるかどうかを判断するメタ認知力を育てよう。
※動画1つについて A4で平均1枚以上(1ページは, 40字×30行が基本)
※このレポートは堅苦しくしてはいけません。美しいだけでなく, 採点者が楽しめ, さらに感動するようなレポートに。

a) (いつ, どこで) 何回ぐらい, どれぐらい熱心に見聞きしたか。

「ちゃんと聞きとれるように英語音声を自分のものにするには, 覚えてしまうぐらい繰り返して聞き返す必要がある」ということは, それこそ耳にタコができるぐらい繰り返して言っているし, 学生たちも頭では理解しているようですが, なかなか実行してくれません。a) は, 否が応でも聞かせようという脅迫も込めた項目でした。期待通りに, 「10回も20回も聞いた」という答が多数で, 「聞き重ねたら聞こえ方が変わってきた」という嬉しいことを書いてくれた人が何人もいました。

b) 聞きとりにくかった語句や表現を具体的に抜き出し分析する

この項目は stress timing によって, 音が短くなったり省かれたりするメカニズムを, 自分なりにどれだけ役立てているか, を自分で検証してもらい, メカニズム理

解を再確認してもらう目的です。ほぼ全員がいくつも抜き出していました。例をあげると：

- ・「Many of those who will have been directly affected by this shooting may be migrants to New Zealand. の will と have が一緒になっている気がしました。1回聞いた時はそのことに気づきませんでした。2回目に「あれ？」と思ってその部分を何度も聞いたんですが、やっぱり have が聞こえませんでした。その部分だけ0.5倍速にしてみたら、なんとか聞こえました。通常通りに聞くと will と have がくっついて「ウィルブ」にしか聞こえませんでした。しかもその後には been があるから余計に have が聞きとりにくかったです。一応意識すればその部分は聞きとることができますが、これが普段の会話とかで使われるとかなり厳しい。これを聞きとれるようになるには耳が英語にかなり慣れないと無理だなあと感じました。私が聞きとれなかった理由はまだまだ耳が英語に慣れていないとわかりました。」
 - ・数人が behalf は「ビハーフ」だと思っていたけど何度聞いても「バハーフ」と聞こえた、と書いていました。ストレスのない音節の母音はあいまい母音 [?] になったり（さらには抜け落ちたり）するというのを自分で発見し、やっと実感できたのだと思います。
 - ・「who have been in this country のところはたしかに who と this country 以外はなんて言ってるかわからないけど、気にしなくていいことがわかった」ストレスのない音節が非常に軽くなることを理解しています。
 - ・「February の Fe はちゃんと聞こえるけど、bruary のところは口の中でもごもご言っていて聞きとりづらかった」これも上と同じですが、英単語の読み方が本人さんの中で変化したと思います。
 - ・「caught fire の fire が何回聞いてもファーに聞こえる」英語の2重母音の音を今まで誤解していたようです。説明ではなかなかわかってくれないのですが、自分で見つけることでやっと気づいてくれました。
- また、語彙不足で聞きとれない、背景知識がないと聞きとれない、聞きとりは「音」だけじゃないんだ、と全員が気づいてくれました。bottom-up listening と top-down listening の説明をいくらしても聞き流すだけだったのが、やっとピンときたようです。

c) 「こんな言い方をするんだ！大発見！」

「聞きとり」というと、学習者の頭の中は、文字通り音の聞きとりだけで終わってしまいがちです。高校で受験用の単語集を持たされ、それを暗記することが語彙を増やす方法だと思い込まされているせいで、聞きとりと

語彙が結びつかないからでしょう。

上の例と同じ箇所ですが、次の文の caught fire を、「こんな言い方できるんだ」と発見してくれた人がいました。

That was the one that caught fire and spread across the whole South.

こういう気づきを重ねると、生きた語彙がどんどん増えていきます。

address が「住所」じゃなくて「演説」の意味で使われているのに初めて遭遇して、なんで「住所」と「演説」が同じ語なんだろう、と調べた人もいました。語彙の習得は暗記だけではいけないことに気づいてくれたようです。

d) 動画の内容について。内容を心で受けとめることが、語学力を伸ばす。

Harriet Tubman のスパイ活動や、黒人奴隷 R. Smalls が南軍の軍艦を盗んで北軍に加わったことなど、初めての話で驚いたようです。「しっかりと内容を理解することができれば、英語の学習は楽しい」と改めて実感してくれました。

初めて知ったという内容の中には、「separate but equal (分離すれど平等) が差別を温存させた」ことや、「American Dream が白人だけのものだった」こと、などがありました。「Civil War (南北戦争) を知らなかった」「Japanese American という存在を初めて知った」には私が驚きました。

4. まとめ — 達成できたことと、今後の課題

日本語耳に向けて調整されたのではない YouTube などの生英語を、どうしたら聞きとれるようになるか、という入り口までは学生さんたちを案内できたかと思えます。

今までほとんど意識することがなかった stress timing を意識することで、英語音が日本語耳には捉えられなかったり、消えてしまったりするメカニズムが理解しやすくなったと彼らは感じているようです。また、学校英語を通じて今まで「英語音」だと思い込んでいた音は、実際の英語音とは違うということと、その違いを1つ1つ発見して積み重ねていく必要があることにも気づいているようです。

さらに、語彙不足や背景知識不足も聞きとれない原因だ、聞きとりは耳だけの問題ではない、ということも意識してくれるようになりました。

個人差はありますが、自分なりの聞きとり方略をつかみかけているようです。ここからは、各自が independent learner あるいは autonomous learner として主体的に学んでくれるかどうかにかかっています。

さらにまた、その方略を他の英語学習者に容易く伝えられるようなかたちに一般化してくれれば、将来教壇に立つ時に非常に役立つでしょう。聞きとれない原因を分析し説明することは、ほとんどの native speakers にはできませんから、日本語人教員がもっと研鑽すべきだと考えます。

引用文献

井上美穂. (2009). 「フランス語中級学習者・上級学習者・母語話者における母音と子音の長さの比較」 学習院女子大学紀要第11号 pp.29-38

Nagamine, T. (2011). Effects of Hyper-Pronunciation Training Method on Japanese University Students' Pronunciation. Asian EFL Journal Professional Teaching Articles Volume 53 July 2011.

<http://asian-efl-journal.com/PTA/Volume-53-tn.pdf>

Ramus, F. (2002). Acoustic correlates of linguistic rhythm: Perspectives.

http://cogprints.org/2273/3/ramus_sp02.pdf
<http://www.shin-eiken.com/info/2017/20171210thurlow.html>

文献外引用資料（インターネットの動画サイト等）

FLUENT ENGLISH: The “H” Reduction in American English Pronunciation | Rachel's English 2018/12/18 に公開

<https://www.youtube.com/watch?v=ZuNOsRVXPfw>

参考文献

英語発音クリニック Yumi's English Boot Camp：「【英語発音ルール】リダクションー音が消える，あいまい化する現象」 <https://englishbootcamp.jp/?p=11617>

「最短」英会話道場？学習法から評判の英会話教材まで「英語の音の変化②「破裂音が聞こえなくなる」現象」 https://english-samurai.com/?page_id=1023

文献外参考資料（インターネットの動画サイト等）

Rachel's English: "English: A Stress-Timed Language - American Pronunciation". Published on May 8, 2012 <https://www.youtube.com/watch?v=PrAe07KluZY>

Steve Kaufmann - lingosteve: Stephen Krashen, an Interview. Published on Feb 12, 2013 <https://www.youtube.com/watch?v=pqVhgSvwWYk>

XansWorld: Syllable-Timed vs. Stress-Timed Languages. Published on Jan 24, 2010 <https://www.youtube.com/watch?v=sUMM5eCvi8w>